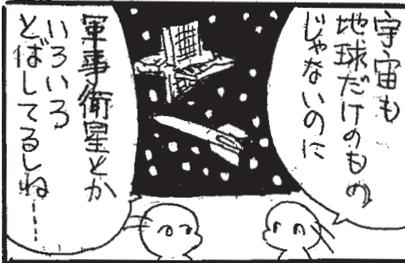
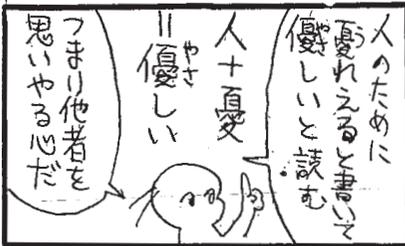


# 編集後記

◆今号は区切りのよい140号。いつも以上の玉稿が集まったのではないでしようか。熟読玩味のうえ、実際の日々の行動に生かした智慧が書き込まれているように思います。

話題変わって、今年のお天気。台風18号の被害も各地で起きました。読者の皆様の地域ではいかがでしたでしょうか。私の故郷、福井県小浜市太良庄でも、土手が破れて集落の前面にある水田が水没。小浜市内へ出る農道も冠水して孤立の日があったとか。こんなときに、原発事故（大飯、高浜、美浜、もんじゅ、敦賀）が起きたら逃げようがありません。

（對馬 劣）  
◆小田実さん追悼集を本号で紹介した後、闘病中の私は、久々に無理をして遠くへ出かけた。



2013.8.9. 10:30PM\*

けた。20代初めからのつきあいだった先輩編集者である友人の長野での散骨への参加。長野オリンピック反対運動で、スポーツマフィア・サマランチを追いかけまわした時以来の長野だった。帰ってきて昨日、自然保護運動から合流しこの反対運動を共にした知人の死を知らされた。2020年東京オリンピック決定ファイバー（プルトニウムと首都直下型地震で「お・も・て・な・し」）のバカ騒ぎの中で（死者）を思う。

（天野恵二）

◆7年後の五輪開催地が東京に決まったとの報道の際、「失望落胆したスペイン・マドリーの市民の姿」がテレビや新聞で紹介されたが、私にはメディアの「半創作」としか見えなかった。私の知る限り90%のスペイン人はサッカーの熱狂的ファンではあるが、他のスポーツに強い関心を持つ人は稀だ。若者の失業率が6割に近い厳しい現実の中で、五輪に使うお金があつたら——というのが彼らの本

音だと思う。日本でもそう感じている人の声は隠されてしまったが。

（本野義雄）

◆シリアの化学兵器をめぐって、1999年のコソヴォ紛争以来の、人道的介入の声にわかに高まった。そうしたがっている米英両国で、「2003年イラク戦争時の大量破壊兵器のウソを忘れるな」の世論がわかに高まっている。わが日本人の記憶力は短すぎるのか、トロすぎるのか？

（高橋武智）

◆映画「少年H」を観た。隣に親子連れ。食べたり喋ったりしていたが、始まると止んだ。H少年は私の5歳上だから、彼の情景は戦中の中学生だった叔父や私自身の記憶と重なって生々しく迫ってくる。しかも単なる回顧ではない。「新聞は真実を書いてない」「自分で見、考えることが大事」。日や父親のセリフは、大地震や放射能被害から目を逸らさせるようにオリンピックに沸く現実突き刺さる。——上映中、子供らは実に静かだった。終わってからも、しばし無言だった。（いくみ）

◆「読者のたより」に毎号、会員の方々から掲載できないほどの数の今の政治についてのご意見や本誌への批判、賛同をいただいております。この欄が百家争鳴、炎上することを楽しみにしています。

（有馬保彦）

◆怒涛の編集作業。でも素晴らしい原稿を頂くと、自分の手柄（笑）のように嬉しく疲れも吹き飛びます。今回も心のこもった力作をたくさん頂きました。今号は都合で「事務局だより」はお休みです。（野澤信一・本号担当）

36